

トマス・テイラーにおけるプロティノス受容に関して

——両者のテクストに基づく比較考察——

三宅 浩

序

トマス・テイラー (Thomas Taylor, 1758-1835) は、古代ギリシア哲学を産業革命下の英国において翻訳、および論文というかたちで紹介した人物である。テイラーの古代ギリシア哲学に対する深い理解は銘記すべきであるが、それは、新プラトン主義の体系を通してのものであった。彼は若い時期から数学への関心に誘われて古代ギリシアの知恵に触れ、アリストテレス、プラトンを学んでいった。それからまもなく、いわゆる古代ギリシア哲学を、ある意味で総括した人物と出会う。その人物がプロティノス (Plotinos, 205-270) である。¹⁾ プロティノスはオルベウス教、ピュタゴラスからの思想の流れを汲んだ哲学を語っている。そしてこの哲学がプロクロス (Proklos, ca. 410-485) によって集大成され

ることになる。テイラーはプロティノスとテクストにおいて出会い、『エネアデス』における半数の論文(二十七編)を英訳し、そのおのおのの論文にテイラー自身の注を付けている。²⁾

テイラーは在世当時、英国におけるロマン派の詩人たちに、少なからぬ影響を与えた。³⁾ それゆえ、彼を通してプロティノスの思想が、詩人たちの詩作の有力な源泉のひとつとなりえた、ととらえることができる。したがって英国ロマン派の詩人たちが提出した作品の豊かさは、プロティノスの思想を通じてのものだとも言えよう。それゆえわれわれの主要な関心は、テイラーがどのようにプロティノスを受容しているかにある。そのためには、両者のテクストにおける比較考察が必要となる。そこでわれわれは、いわゆる新プラトン主義思想の根幹をなす、プロティノスによる『エネアデス』とトマス・テイラーによる『プラトン哲学者の誓

い」(1865)を比較するテキストとして取り上げる。後者はテイラーによる小論で、いわゆる新プラトン主義の諸原理を示す宣言書である。

プロティノスは『エネアデス』において、一者を万有の原理として提示している。その一者をテイラーがどのように受容しているかが問題となる。特に拙論では、テイラーによる一者受容のようすを見極めるために、「魂の一者との合一」という事態に絞って考察する。なぜなら、この「合一」という事態こそ、いわゆる新プラトン主義の思想において、人間の魂がめざす目的であり、われわれにとって最も重要なことだからである。

そのためにまずわれわれは、上に提示したテキストから、テイラーによる一者の受容について概観し、特に「魂の一者との合一」に関して問題となり、それゆえ留意すべき箇所を指摘する(第一節)。そしてテイラーによるその記述内容が、プロティノスの『エネアデス』から、どのような反映を受けているかを考察するため、『エネアデス』において、特にテイラーが「魂の一者との合一」を理解するうえで、重要と思われる四編を通して、各論文の内容を整理する(第二節)。それから、それらのプロティノスによるテキストをたどった後に、拙論の(第一節)で指摘した問題をどのように理解すればよいかを、同節でわれわれがまとめ、テイラーの一者受容に関する文章を交えて考察する。この考察を通してわれわれは、『エネアデス』がテイラーのテキストへ

どのように反映しているかの一端を、客観的かつ具体的に検討することをめざす(第三節)。そして、拙論の内容をまとめるとともに、今後の課題を示すことにする(第四節)。

以上の考察を通して、トマス・テイラーにおけるプロティノス受容研究の一環を形成したい。

一 トマス・テイラーによる

一者受容と留意すべき問題点

序においてわれわれが提示した「プラトン哲学者の誓い」において、テイラーは新プラトン主義の存在論的体系の要点をとらえて概説している。その文章は二十二の条文から成っている。そして各条は、「私は信じる」という文句で書き出されている。そこにおいて、一者を原理として、知性、魂、物体が順番に発出し、万有を形成しているようすが語られている。その最初の七つの条において、一者が主題的に語られている。以下にその概要をまとめる。

第一条から第七条までは、万有の原理について語られている。それは万有をはるかに超越しており、超實在的なものでさえある。この言語に絶したものを、われわれは万有の第一原因として一者、われわれの万有に対する欲求の究極のものとして善なるもの、と呼ぶべきだろう。そしてこの一者が、自身の直後のもの(知性)を、自身に類似したものとして産

み出す。その類似について、火から直接に発する熱、および太陽における本質的な光とそこから出る光との類似をたとえとして語っている(第一条から第三条)。

一者から万有が生じる。万有は固有の異によって増加する。そして万有は存在者としての諸原理を持つ。知性界にはさまざまなものの原理がある。美しいものたちには美の原理がある。そして、そうしたものはその原理に吊り下げられている。万有がさまざまな原理を持つ一方で、一者は第一原理であり、万有に先立つ単なる原理である。それは多から始められるのではなく、極点としてひとつの単子となるべきであり、諸原理の原理である。一者から直接産み出された知性は、實在善にとどまる。しかし知性に続く諸々の魂たちは、實在善から落ち、そのため分有にしたがった善しか所有していない(第四条から第五条)。

万有は一者に因果的に内在している。すなわち、一者は万有から超越したものであり、あらゆるものに先立つものである。「先立つ」とは、他を隔絶した超越を示し、数が単子において、円が中心において示されるように、神秘的に存在している。この神秘は、万有が存在するという神秘と同一である(第六条)。

以上が、テイラーがプロティノスから受容している一者についての記述である。一者が万有の原理として、諸存在者がそこから発

出する根源として記されている。また一者から知性が発出した後に、魂がそれに続いて生ずることも述べられている。それから、テイラーは自身の記述において、「魂の一者との合一」について述べている。この「合一」はいわゆる新プラトン主義の思想において、人間の魂の目的である。この「合一」こそ、一者について最も関心が持たれることだと見えよう。しかし、その次第はどのようにになっているのだろうか。テイラーの記述をまとめると次のようになる。

魂は一者との合一をめざす。魂のそのための出産は言語に絶して、沈黙したまま一者への共感を通してなされる。魂は一者を、言語に絶した、實在以上に神秘的なものとしてとらえる。一者は知性に隠されている(第七条)。

「魂の一者との合一」は言語に絶したことであり、神秘的とさえ言いうる、とテイラーは述べている。それゆえ魂にとつて、「一者は知性に隠されている」と彼は記しているのだ、とも考えられる。しかし、それだけでは、魂がどのようにして一者と「合一」するかは不明のままである。したがってわれわれはこのことに関する記述を、具体的に『エネアデス』から探索する必要がある。この作業をわれわれは第三節において試みる。しかしその前に第二節において、「魂の一者との合一」について重要と思われるプロティノスの論文を四編、『エネアデス』から選抜し、その各論文の概要をまとめることとする。なぜなら、それらのプロ

テイノスによる論文において、テイラーがプロティノスが述べる「魂の「一者との合一」を受容する上で、重要な記述があると思われるからである。また、テイラーの文章とプロティノスの思想を具体的に比較する上で、プロティノスによる論文の諸特徴を押さえることは、必須のことであろう。以下、拙論において取り扱うプロティノスの諸論文についてまとめる。

二 「魂の「一者との合一」に関して言及している『エネアデス』における四論文⁶⁾

「魂の「一者との合一」についてプロティノスが主題的に論じている論文の筆頭は、*Enn. VI, 9*、⁹⁾「善なるもの、一なるもの」である。まず、この論文に絞って、以下にその概要を記す。

プロティノスによるこの論文は、第一節で「一」であることがものを存在者として存在させる根源であることを説き、第二節で、「一者に続く知性が直知作用と直知対象を持つ」「二」であることを示している。そして第三節から、第三のものである魂が、「一者に帰還し始めているようすが述べられている。それによれば、魂の役割は知性界から受け取ったものによって感性界を形成し管理することであり、魂の目的は「一者へと合一することである。そのため、魂は知性界に上昇する。第四節では、「一者のありようが記されており、「一者が存在者以前のものであり、万有に臨在しながら分離していると説かれている。それゆえ、「一者と合一すること

をめざす魂は、自身が持っているあらゆるもの（多）を捨てなければならぬ⁸⁾。第五節では、万有から超越した「一者のありようが語られており、第六節では、「一者の特性が語られており、「一者は力として不可分であり、自足したものであるという¹¹⁾。

第七節では、魂が「一者と合一するための条件が述べられている。そのため、魂は知性に由来するあらゆる形相を捨て、無知になることが必要となる。第八節では、魂が「一者と合一することの意義（その二）が述べられている。この「合一」という事態は、知性の作用より重要であるという。なぜなら、知性において、直知作用と直知対象は「二」としてあるが、「合一」において、魂は「一者と「一」になるからである。第九節において、「一者は魂が欲する究極の対象であることが述べられている。そして、拙論の〔第一節〕にあるように、「一者は無尽の光を放つ太陽にたとえられている¹⁶⁾。要するに、「一者は魂の始原かつ終極なのである¹⁷⁾。

第一〇節では、魂が「一者と合一することの意義（その二）が示されている。この「合一」という事態は、魂における理性の働きを超えた、論理以上のできごとだという。第一二節には、「一者との合一における魂の状態が述べられている。その記述によれば、魂は一つの恍惚、忘我の状態で一者と合一するというように受け取られる¹⁹⁾。

以下、残りの三論文おのおのの特徴という点に着目して、その概要をまとめる。*Enn. V, I, (10)*「三つの原理的なものについ

て」では、一者、知性、魂という三者の関係について論じられている。魂の成立において宇宙靈魂と並んで、人間の魂である個靈は特に、自己自身を知る真の自己探求として、感性界にある自己のありようから転向をして、一者へ向かうという。そこで、万有の根源である一者は、いわば無である⁽²⁰⁾と受け取られる。魂は知性から生じた三番目のものであり、知性の外にある諸存在者とともに、そこから吊り下げられているとも述べられている。

Emn. V, 5, (32)「ヌースの対象はヌースの外にあるのではないこと、および善者について」において、万有の根源が一者であることが、さまざまな角度から論じられている。この論文では、一者は、第一の神、無尽の力、言語に絶したもの、数としての一の根源、万有を包含するものとして説明されている。だがそのうえ特に、一者は、他の存在者と共通することのない、別なものだと説かれて⁽²²⁾いる。

Emn. V, 3, (49)「認識する諸存在とそのかなたのものについて」では、「一者と知性の差異を述べ、魂を一者との合一へと導いている。魂は知性界に上昇して知性になる。第一〇節において、そうした知性は、一者がなれないかを考察することが必要となる⁽²³⁾。ある意味で、絶対否定とも言いうる過程の後、魂は知性を通して一者に触れる⁽²⁴⁾と記されている。

以上、『エネアデス』における四論文における記述に基づいて、第一節において問題となった箇所の考察を、以下の第三節におい

て行う。

三 「魂の一者との合一」をめぐる問題点

第一節においてすでに、拙論で取り上げたテイラーの文章において、「魂の一者との合一」に関して、留意すべき箇所を指摘しておいた。魂は一者との「合一」をめざす。しかしテイラーは、「一者は知性に隠されている」と記している。そうだとすると、魂が一者との合一をいくらめざして知性となっても、一者の所在は分からないことになる。ここにはアポリアがある。なぜなら、魂は自身で見いだせないものと合一する、ということになるからである。これは矛盾した事態だとも言いうる。それゆえわれわれには、「魂の一者との合一」の直接の契機と思われる記述を、前節で取り上げたプロティノスの四論文の中から見いだす必要がある。それによって、上に挙げた「魂の一者との合一」という局面で生じるアポリアを解決の方向へ導きたいと思う。

まず、万有の根源である一者を、どのようにプロティノスへとらえているのだろうか。彼はその記述を、特にプラトンから引用している。

「知性の原因となるものは……実在を越えている⁽²⁵⁾（『国家』[VI 509 bc]）」

実在である知性の彼方に、一者は存する。われわれが拙論の第一節で示したように、そのようなテイラーは次のようにまとめて

いる。

それは万有をはるかに超越しており、超實在的なものでさえある。

ここには一者が万有の根源かつ原理であり、万有を超越しているようすが述べられている。それでは、「一者」は万有に対して、どのようなありようをしているのだろうか。

前節で見たように、*Enn. VI, 9, ⑤*の第四節では、「一者」のありようが記されている。そこでは、魂が合一へ向かう一者が、「万有に臨在しながら分離している」というようにプロティノスは述べている。しかしその言い方では、人間の魂を含んでいる方とは、矛盾した一者のありようを伝えるだけである。それゆえわれわれによって一者は、整然とものをとらえようとする理性によっては、とらえられるものではないことになる。それゆえ、いかなるものも、直接には一者に至れないことが分かり得よう。それゆえ、テイラーによる「一者は知性に隠されている」と述べているのだらう。それでも、魂は「一者との合一」をめざす。なぜなら、それが人間の魂の、すなわち個霊の目的だからである。この「合一」における魂と一者との関係には、ある意味で弁証法的な契機が必要だと言える。

それでは、「魂の一者との合一」という事態を、プロティノスはそのように語っているのだろうか。同論文、*Enn. VI, 9, ⑤*、第一〇節の記述から見てみよう。「この『合一』という事態は、

魂における理性の働きを越えた、論理以上のできごと」だという。したがってある意味では、いかなる造作を加えても、魂は「一者との合一」には至れないとさえ言いうる。それゆえ、魂にとって「一者との合一」は、知性から獲得しているあらゆるもの、すなわち、「多を捨てなければならぬ」のである。一者は「多」ではなく「一」である。そのようすを以下に引用するプロティノスによる文章が語っている。

「ともすれば、一者という名も多に向けて打ち勝る状態であるということかもしれない。」⁽²⁶⁾

このことは、万有の根源となる一者が、「多」である知性を否定する呼称だ、ということであろう。またそれゆえ、すでに同論文の第八節で記されているように、「魂の一者との合一」は「知性の作用より重要」なのである。知性に導かれるかたちで、人間の魂は活動する。知性こそ、直接に魂を産み出したものである。しかし魂は、その知性を超えて、その根源の一者にまで至ろうとする。しかし、その過程には、先述したように、いわゆる弁証法的な契機が必要となるのである。

それでは次に、「魂の一者との合一」に至る経過を、実際にたどってみよう。同論文 (*Enn. VI, 9, ⑤*) の第七節では、魂がどのようなになれば、一者と合一が可能になるか、について記されている。ここではプロティノスは、魂はあらゆる形相を捨て、無知になることが必要となる。それからいわゆる脱魂状態において、魂

は、一者と「合一」する。そのとき初めて、「魂は自己の眞の出自を知る」ようになるという。

魂は、上述したように、「多」である知性を捨てる。すなわち知性に属するあらゆる形相を捨て去る。それゆえ脱魂状態になる。そのようすを以下のプロティノスからの引用から見てもみよう。

「……なぜなら知性の力を通して感知するということは、他方で知性を捨てるようなことだからである。」⁽²⁷⁾

それゆえ、魂は知性を欠いた、「無知」の状態で、「一者との合一」をめざすのである。つまり、魂は理性的な部分から知性を通して、かつ、知性を否定して、「一者と合一」するのだ、と言うことができる。「一者との合一」をめざす魂は知性となる。知性は魂にとって一者への通路である。しかし魂は知性を否定しなれば、一者には至れない。知性は魂にとって、一者に至るための否定的な媒介となる。しかし否定的な媒介となる知性とは、どのような知性なのだろうか。

「だがこのとき、そこにいるのは知性なので、知性は一者を眺めるとき、自身の非知性的な部分で眺めるのである。」⁽²⁸⁾

魂は知性となって、知性の非知性的な部分、すなわち純粹知性を通して、一者に至るのだ、ととらえることができよう。とすれば、一者との合一をめざす魂にとって、否定的な媒介として作用する知性は、純粹知性であることになる。この純粹知性とは、知性の

原因者である。⁽³⁰⁾ 知性において「無知」になった魂は、この純粹知性を通して一者に至る。そのことに關して、以下の引用で当節を終えよう。

「それでは、どうすれば魂が一者を見るものが生じるのだろうか。万有を取り去れ。」⁽³¹⁾

四 結論と今後の課題

われわれは第一節において、トマス・テイラーによる「プラトン哲学者の誓い」を取り上げ、テイラーがどのようにいわゆる新プラトン主義の原理である一者を受容しているかをまとめた。第二節ではプロティノスによる四論文を取り上げ、そこにおいて、一者を考察した。第三節では、テイラーのテクストにおける「一者は知性に隠されている」とはどういう意味か? という問題提起のもとに、魂の一者との合一における実状に迫り、トマス・テイラーによるプロティノス受容の一端を考察した。

今後われわれは原理的な美を通して、一者に関する考察をさらに深めたいと思う。なぜなら、テイラーが一者に人を導く糸口として美を取り扱っているからである。同時に、その思想が、英国ロマン派の詩人たちに少なからぬ影響を与えた、当のものと考えられるからである。⁽³²⁾

(一) "Biographical Accounts of Thomas Taylor", in Cathleen

- Raine and George Mills Harper(ed.), *Thomas Taylor The Platonist*, Princeton: Princeton University Press, 1969. pp. 106-113.
- (2) Plotinus. Taylor, Thomas(trs.), *Collected Writings of Proclus*, Frome : The Prometheus Trust, 1994.
- (3) Raine & Harper, op. cit., pp. 3-48.
- (4) *ibid.*, pp. 437-445. "The Platonic Philosopher's Creed" 原文は *Miscellanies in Prose and Verse* (1805) に収録。
- (5) *ibid.*, p. 440. 原文は「善なる…… and concealed in its first progeny, the Intellegible eges」に訳和されている。
- (6) 原文は「その種をひきつる」 Paul Henry. Hans-Rudolf Schwyzter(ed.), *PLOTINI Opera*. Tomus II, Enneades IV-V, Tomus III. Enneades V, Clarendon: Oxford University Press, 1977 & 1983.
- (7) *Enn.* VI, 9 (9), 4, 24-25.
- (8) *ibid.*, 4, 33-34.
- (9) 本書「第1節参照」。
- (10) *ibid.*, 6, 9.
- (11) *ibid.*, 6, 17.
- (12) *ibid.*, 7, 14.
- (13) *ibid.*, 7, 18-19.
- (14) *ibid.*, 8, 27-28.
- (15) *ibid.*, 8, 26-27.
- (16) *ibid.*, 9, 6-7.
- (17) *ibid.*, 9, 20-22.
- (18) *ibid.*, 10, 7-9.
- (19) *ibid.*, 11, 23-25.
- (20) *Enn.* V, 1, 6, 39-41. *ti oûn kai p̄gai toû teleiōtaton kêreai; j̄n̄deu ar' au' toû n̄ ta ierōtata j̄m̄i atōn.* (それではこの上なく完全なもののに近づけはなれど、いまだうかた、なにもの「善」から生じない、というよりはむしろ、その後で最大の「知性」が生じるのである。)
- (21) *ibid.*, 6, 33. …… ἐπισημαίνου ἡνωτάτων. ……
- (22) *Enn.* V, 5, 10, 4-5. …… ἔλαλο μὲν γὰρ οὐδὲν ταυτέρου, δεῖ δὲ τι ταυτέρου εἶναι.
- (23) *Enn.* V, 3, 10, 33-34. …… δεῖ πρῶτον κέρειν ἢ μὴ ἔστω.
- (24) *ibid.*, 10, 42-43. …… ἀλλὰ βίβλις καὶ οἶον εραφὴ μόνου ἀφ᾽ ἑαυτοῦ καὶ ἀνόητος ……
- (25) *Enn.* V, 1, 8, 8. (τοῦ αἰτίου δὲ τοῦ) …… ἐπέκεια οὐ αἰτίας.
- (26) *Enn.* V, 5, 6, 26. τάχα δὲ καὶ τὸ ἐνθουσια ταῦτο ἄπου ἔχει πρὸς τὰ πρῶτά.
- (27) *ibid.*, 6, 21. …… ὅτι μὲν ἔστι δὲα ταύτου μαθῶν οἶον ὁ "εἰσι τοῦτο ἀπέειπ-"
- (28) 「神性知性 (*Enn.* VI, 9, 3, 26) …… ἀλλὰ καθάπερ τῶ μὲν τὸ καθ' αὐτάτου θεοῦ καὶ τοῦ τοῦ τῶ πρῶτου. (……) そのこぼはな〜 清浄な知性によつて、その上知性の第一のこぼりによつて、「一者」筆者記) 見るのである。) および田中美知太郎「水地宗明 田之頭安彦訳『プロティノス全集』(中央公論社、一九八六年) 第三巻、四八三頁」注七参照。
- (29) *ibid.*, 8, 22-23. οὐδὲ, ὅτι ἐστὶ νόος, οὗτω βίβλις, ὅτι βίβλις, τῶ εἰς αὐτὰ μὴ μὲν.
- (30) 田中「水地『プロティノス全集』(一九八七年) 第一巻、六八頁参照」。
- (31) *Enn.* V, 3, 17, 37-38. πῶς αὖ οὐν τοῦτο γένουτο; ὁδὲαίε πάντα.

(32)

この件に関しては、『中部哲学会年報』第三四号、(二〇〇二年三月刊)所収の拙論「トマス・テイラーにおけるプロティノス受容に関する一考察」、第二章(五一頁―五四頁)において、トマス・テイラーにおけるプロティノス受容についての考察の端緒として取り上げた。

(みやげ・ひろし、哲学、金沢大学非常勤講師)